

## 巻頭言



# 「思いやり」の気持ちを持って

眞田 仁

(一社)寒地港湾空港技術研究センター 代表理事 理事長

本年4月より当センターの名称に「空港」が追加されました。折しも民間事業者による道内7空港の一体運営がスタートし、北の空は新しいステージに移行しました。このような大きな変革の中で、当センターとしても、今までの調査研究で培った技術力と道内各地域とのネットワークを生かして、さらに北海道のみなどの発展に貢献していきたいと考えていますので、今後とも皆様のご指導・ご協力をよろしくお願いいたします。

さて今、世の中の関心は新型コロナウイルス感染症のことに向けられています。依然として医療従事者は毎日大変な思いで過ごされていますし、飲食・観光業界の苦難はこれからも続きそうです。そのような中で、社会資本整備に関わる様々な業務は、幸いにもストップすることなく例年とほぼ同様に進捗していることは大変ありがたいことです。関係者の努力と工夫に敬意を表したいと思います。

当センターにおいては、新型コロナウイルス感染が拡大しつつあった本年2月頃より様々な対策を講じてきました。最初は、学校の一斉休校に伴う子供の保護者(職員)の特別休暇措置でした。その後、マスクや消毒液の購入、執務室のパーティションの設置や執務中のソーシャルディスタンスの徹底、公共交通機関の利用回避や時差通勤の推奨、リモートデスクトップ方式によるテレワークの導入とそれに伴う機器の購入、体温測定器の設置、職員が感染した場合の行動マニュアルの作成など、想像力を働かせ

ながらできる限りの対応を行ってきたところで

す。3年前の本誌No.35の巻頭言に、「危機管理のすすめ」を書きました。そして「想像力」を働かせることの重要性を説きました。今まさに、見えない敵と戦うコロナ禍の最中において、この「想像力」がいかに大事であるかを実感しているところです。

ウイルスが目に見えないこともあり、普段何気なく会話している職場の同僚や仕事仲間は無症状感染者がいるかもしれないこと、そして実は自分も感染しているかもしれないことなどを考えれば、万が一の際にはどう行動したらよいかを想定しておくことは感染防止の要諦だと思います。

移動の自粛が緩和された後に、東京から地方に帰省するなど人々の往来が増加しましたが、その際に彼らに向けられた心無い言葉がメディアで取り上げられ話題になったことは記憶に新しいところです。確かに、首都圏に比べると地方の感染者数は圧倒的に少なく、その状況を維持したいという地方の人々の気持ちは理解できますし、旅行者も都会から地方に来て無神経な行動は慎むべきだと思います。だからと言ってどういう事情があるのかも確かめずに一義的に「帰れ」と非難するのは、ちょっと「想像力」が不足しているなと思いました。緊急を要する用事などがあり遠慮がちに帰省した方々への「思いやり」があっても良かったのではないのでしょうか。

最近では、AIのおかげで様々な事象の予測ができる時代になりました。もしかしたら、対面した相手がコロナウイルスに感染している確率を求めることができるかもしれません。しかし、相手の立場になって「思いやる」ことはAIにはできないことだと思います。東日本大震災から来年で10年になります。地域の復旧・復興は相当進んでいるようですが、「心の復興」にはまだまだ時間がかかると言われています。コロナウイルス感染症も多くの人は無症状のままか、治癒して元気に過ごしています。しかし、感染拡大とともに被った「心の痛み」はなかなか治癒しないのではないのでしょうか。だからこ

そ、不確実性の時代に生きる我々に必要なのは、「想像力」そして相手の立場になって行動する「思いやり」だと思うのです。

当センターでは現在、北海道港湾の中長期政策、港湾・漁港の技術ビジョンに関する調査を実施しているところです。ウィズ／ポスト・コロナの時代に、どのようなみなどの将来像を描くことができるか、大いなる「想像力」を持って取り組むとともに、北海道の港湾・空港・漁港の整備・振興が進展するよう「思いやり」の気持ちを持って地域に貢献していきたいと考えています。